

「キリスト教会の礼拝って??」

～実際に礼拝を体験してみましよう～

ヨハネによる福音書 4章 16～26節 讚美歌 54、505

16 イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、17 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。18 あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

詩編 36 編 6～10 節

6 主よ、あなたの慈しみは天に／あなたの真実は大空に満ちている。

7 恵みの御業は神の山々のよう／あなたの裁きは大きいなる深淵。主よ、あなたは人をも獣をも救われる。

8 神よ、慈しみはいかに貴いことか。あなたの翼の陰に人の子らは身を寄せ

9 あなたの家に滴る恵みに潤い／あなたの甘美な流れに渴きを癒す。

10 命の泉はあなたにあり／あなたの光に、わたしたちは光を見る。

■ 本論

岡山教会の柏木です。本日はお招きいただき、ありがとうございます。この南与力町教会は、中会の集会などで何度も使わせていただきながら、考えてみれば、と言いますか、当然のことですが、日曜日の礼拝は初めてでして、この美しい礼拝堂で、賛美が献げられ、祈りが献げられ、御言葉が読まれという、喜びを与えられていますこと、感謝をしています。

そのような神様の御恵みのなかで、御言葉からお話をさせていただきます。

今日、お読みしたところの 24 節に、こういうイエス様の御言葉がありました。

神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

今日は、皆さんとご一緒に、このイエス様の言われる礼拝について共に考えたいんです。しかし、意外に思われるかもしれませんが、礼拝とは何かということについて、教えられる箇所は聖書の中で、そう多くありません。特に、イエス様が、礼拝とはこういうものと、直接的に教えられたのは、もうほとんど、この箇所しかないんですね。この箇所から教えられたいと願うのです。

礼拝とは、わたしたちが献げるキリスト教会の礼拝とは何なののでしょうか。

そして、礼拝を献げるものは、どういう存在なののでしょうか。

そのために、今日は、16 節からをお読みしましたけれども、そこに至る状況を少し押さえておきましょう。

舞台はサマリアという、特に、シカルという、聖書の巻末の地図を見ていただきますと、イスラエル地方のちょうど真ん中あたりに位置します村です。

イエス様一行は、エルサレムのあるユダヤ地方から、ご自身の故郷であられるガリラヤ地方に帰って行かれる途中に、サマリアのシカルに立ち寄られました。

が、当時のユダヤの人は、ふつう、その村には立ち寄らないんです。

ユダヤの人と、サマリアの人とは歴史的に衝突がありまして、互いを「汚れている」とののしり合っていました。ですから、ユダヤの人がふつうガリラヤ地方に行くときは、ぐるっとヨルダン川を東側に渡ってから、北上していくんです。

が、イエス様たちは、そんなことをお構いなしに、サマリアを通っていく。

ここに、ふつうは、ありえないということがまず一つある。

もう一つ、サマリアの井戸で、イエス様が休んでおられるときに、女性がやって来まして、その女性に、イエス様の方から話しておられる。7 節のところですね。サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。

わたしたちの文化でも、道端で、見ず知らずの男性が女性に話しかけるといのは、よっぽど困っていることがあるか、よからぬ魂胆があるかというときですよ。

イエス様の時代にも、そういう誤解を受けないように、男性が女性に話しかける、ということは憚られました。まして、ユダヤの男性が、サマリアの女性に話しかけるといのは、まあ、ないわけです。

が、イエス様は、この女性に話しかけられまして、その会話が、礼拝とは何ぞやという、非常に重大な問題に至る。イエス様が話しかけられることにおいて、大切な問いが開かれていく。

神礼拝とはまず、そういうものだということが一つ、ここから知らされます。

わたしたちが、神様を礼拝する、教会に集うと言いました場合には、いろいろなきっかけがあります。今日、礼拝後にお話しをさせていただくアウグスティヌスなんかは、お母さんがクリスチャンで、お母さんに手を引かれて、教会に通った。あるいは、お友達に誘われて、あるいは近くに教会があったから等々。わたしは、大学のときに、こういうオープンチャーチ、特別伝道集会のチラシをもらって、初めて教会に足を踏み入れました。いろいろなかたちがあるかと思うんですけども、いずれの場合にも、そこには、神様の方からの働きかけがあるということなんです。

それは、イエス様を信じるというときもそうです。自分で決意して、決心して信じるんですけども、しかし、神様の働きかけなしに、人は、神様を信じません。イエス様を信じようというときには、そこに神様の働きかけがあったからなんです。

礼拝は、そのように、神様がわたしたちの意識に、あるいは無意識に語りかけてくださる、招いてくださる、そうして始められていくものです。

そうであるならば、今日、この礼拝の場にいると言いましたときに、もうそれは神と共にあるということになります。いや、そんなはずはないという方もおられるかもしれませんが、神様が招いてくださるのでなければ、誰も、この朝、この礼拝に集

うことはありませんでした。罪を抱えた人間は礼拝に足を向けません。神様を求めません。神様が私たちを起こし、招いて下さらなければ、私たちはここにいないのです。そのことをまず、感謝をしたい。

そのうえで、御言葉に聞いてまいりましょう。

イエス様は、サマリアの女に語りかけていかれます。

神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

「礼拝しなければならない」というのは非常に強い口調です。「絶対にしなければいけない」というニュアンスの言葉がギリシア語で使われています。

人間は礼拝をしなければいけない。それは、人間が礼拝をするために創造されたからです。礼拝で水を得て、潤わなければ枯れてしまうように創られているからです。

魂の渇きがここで潤されて生きるために、礼拝しなければいけない。

どのように礼拝しなければいけないのかと言いますと、「霊と真理」をもってです。

「霊」という言葉は、ちょっと、日本語では掴みどころのないものです。

ちょっと季節外れになりましたが、足がない「幽霊」を思い浮かべたりします。

が、聖書が言う「霊」に、そういうおどろおどろしい感覚はありませんで、単に「霊」という時には、ざっくりと言いますと、エネルギー、動いている力なんです。

そういう「霊」は人間のなかにもあります。人間もエネルギーを持っている。

が、ここで言われている「霊」は人間の「霊」ではない。

「神は霊である」と言われていますから、神様の霊です。

礼拝は、神様の霊にもとづく、神様の霊に満たされることです。

聖書の神様というのは、天におられて、人間とかかわりを持たない方ではなくて、人間を招き、人間に働きかけてくださるお方です。この聖書を通して、私たちに語りかけてくださるお方です。今、神が共にあるということ、気づかせてくれて、私たちが活かしてくださるお方なんです。今、共にいてくださるんです。

あなたが元気でも、元気じゃなくても。

神様に希望をもっていても、もっていなくても。

礼拝を礼拝たらしめるものは、私たちにあるのではない。もちろん、この礼拝の場が整えられるためには、多くの人の労力と祈りとが献げられています。が、それさえも神様御自身の働きかけにあるものだという、まず覚えたいと思います。

わたしたちは、しばしば、神様を礼拝する、と言います場合に、そこに自分の願望を置きたがるんです。自分好みの礼拝をつくらうとする。

あるいは、そもそも、自分の願いや望みを叶えてくれるのが神様だと思い込んでいる節があります。こんな神様は好きで、こんな神様は嫌いと思っている節がある。そして、神様を好きなときに、好きなふうに礼拝をしようとしている節がある。また、まったくの善意で良い礼拝をつくらうとする。

でも、本当は、逆です。大切なことは、神様が、人間に求めておられることがあって、それにいかに人間が応えうるかということです。

神様が人間を礼拝に招いてくださって、御心のままにご自身の姿をあらわそうとし

くださって、そうであれば、ひとまず、人間は四の五の言わず、その神様を知るといふことに心を傾ける。そこで、魂の渇きが癒されるんです。本物に触れるときに。

自分の願望が満たされても、願望にはキリがありませんので、その瞬間は良くても、次の瞬間にはまた枯れます。本当にキリがない。けれども、神様の霊の中に身を置きますと、神様の御力は、愛ですから、憐みですから、人間の全存在を受け止めてくれるものですから、その中にある限り、人間の渇きは癒されます。

そして、神様は、御自身の霊を、その御力を、真理というかたちで、私たちに見せてくださいます。「真理 (アレセイア ἀληθεια)」とは、何よりイエス様御自身のことです。イエス様は「わたしは道であり、真理であり、命である」(14章6節)と言われた。イエス様の言葉によって、これが神様というお方だと、私たちは知ることができる。その神様に会おう、いや、その神様が、いくつものありえなさを越えて、あなたのところにやってきてくれる、それが「まことの礼拝」です。

今がその時であると、イエス様は言われる。

今この瞬間に身を置いているのは、凶らずも、であったかもしれない。

熱心に備えてこられた方もおられるでしょう。

けれども、皆が、**今がその時である**という、イエス様の言葉を一緒に聞いている。

ここに、礼拝は生まれている。ここで、魂の渇きを癒していただく。他のもので満たす場合にはまた渇きます。けれども、人間が人間としてある場所、礼拝の場で、人間は人間を取り戻し、渇きを癒します。

だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

この南与力教会で、坂尾先生を通して、あるいは他の牧師、長老方を通して、イエス様の命の御言葉が語られています。その御言葉を100%信頼してください。その言葉から毎週、人間であることを取り戻してください。人間であってください。そういう礼拝のなかに身を置き続けてください。神様はそういう人間を必要とされています。

そのうえで、最後に、二つのことを確認して終わらしましょう。

一つは、霊と真理とをもって礼拝をささげる、その備えの大切さについてです。

教会では、伝統的に、土曜日を「備えの日」と呼びまして、文字通り、礼拝に身も心も備えるということ、教えてきました。が、実際にはと言いますか、私たちの毎日は忙しく、とりわけ昨今の騒がしい状況に、なかなか心落ち着かせられないということも多々あるわけです。それだけでも、これだけは忘れないでおきたいということ、イエス様が教えてくださっています。

それは、これまでの、少なくともこの一週間の自分の歩みを振り返るということです。本当の自分をわきまえ知るといふことです。そのために祈るといふことです。

イエス様は礼拝のことについて、直接、教えられる前に、女性に言っておられます。

16節、「**行って、あなたの夫をここに呼んできなさい。**」

それは、この女性にとって、聞かれたくないことでした。隠すべき急所でした。

それで、女性は言っています。「**私には夫はいません。**」それは嘘ではない。けれども、本当でもない。そのことを、イエス様はご存じなんです。

『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。

イエス様は女性の言葉をくみ取って行かれる。女性には、非常に強張らせている心が合って、それでも時折、ふと漏らすように、真実の欠片のようなものを落とす。

その言葉を決して、見逃されずに、救いとして行かれる。

この女性は、なかなか波瀾万丈な人生を歩んできたようです。五人の夫がいて、今は正式な結婚をしているわけではない同棲中の男がいる。この女性は、ひたすらに愛に渴き、愛を求め、そして愛に破れてきた女性なんですね。

この自分の姿、本当の人の姿を顧みること。

神様のみ前に出る前に、自分を偽らないこと。

そのことを、まずイエス様は求められるんです。それが、礼拝の備えなんです。

本当の神様に出会うために、偽物の、嘘の自分を捨てるということです。

祈りながら、本当の自分を顧みて、犯した罪があること、愛が薄かったこと、忙しさにかまけ、神様を思うことが乏しかったこと。顧みるのです。

イエス様が、女性に、礼拝のことを、お話をなさるのは、その後なんです。

本当の神様の前に、偽物の自分を置いてはいけない。

霊と真理との中に、偽物の自分を置いてはいけない。

強張った心を置くのではない。固くなった心を置くのではない。

魂の渴きに正直になるんです。「水を飲ませてください」。その自分を認めるんです。

それが、礼拝に備えるということです。

その者に、イエス様は礼拝を教えられるんです。

そして、その最初に、イエス様はなんと言われていたか。

それが、確認したかった、もう一つのことです。

イエス様が、礼拝について教えられる、その一番最初に言われていること、それは「女よ、私を信じなさい」ということでした。

イエス様は言われるんです。「わたしを信じなさい」と。

ちょっと変な言い方をしますと、礼拝に招かれている人というのは、「信じている人」じゃないんです。そうではなくて、「信じていない人」なんです。「信じられない人」なんです。どうやって、信じていいかわからない人なんです。

信じている人に、「わたしを信じなさい」と言われるのはおかしいですね。

信じていないから言われるんです。「わたしを信じなさい」と。

私たちは心のどこかで思っているかもしれない。信じる者として礼拝に集うと。

本当でしょうか。本当に、そういう一週間を送って来たでしょうか。

神様を信じる者としてよりは、実は、信じない者として生きたんじゃないでしょうか。成熟したキリスト者としてよりは、悪や無関心にひきずられる罪人として生きたんじゃないでしょうか。何回もイエス様が教えてくださることに挫折したんじゃないでしょうか。気にもしなかったことがあるかもしれない。

イエス様は、聖書の最も大切な教えとして、神様を愛することですと、隣人を自分のように愛することです、と教えてくださいました。

その愛からいかに自分が遠い生活をしてきたのか。

いかに、自分が信じていない者として歩んでしまったか。

罪の敗北の歴史を、信仰者であればあるほど、皆が抱えています。

でも、だから、礼拝に招かれるんです。

もう一回、信じるために。もう一回、信じ直すために。

イエス様がおっしゃってくださいます。「わたしを信じなさい」。

このイエス様のエネルギーに呑み込まれて、身をゆだねる場所が礼拝です。

人間の熱心には限界があります。が、神様の招きには限界はありません。

初めて教会に来られる人も、もう何十年も信仰生活を送ってこられた方も、同じイエス様の御言葉を聞くんです。上級者ですとか、初級者ですとか、イエス様の礼拝にはないんです。みんなが、同じ罪人として、イエス様の言葉を初めて聞くような新鮮な心で、一緒にイエス様の言葉を聞きます。これが礼拝です。

イエス様が言ってくださいます。

「わたしを信じなさい」

お祈りしましょう。

■ 祈り

あなたの家に滴る恵みに潤い、あなたの甘美な流れに渴きを癒す。
命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る。

■ 静止の時